

大音氏。後稱主馬。采地五千石。延寶三年正月朔卒。號德成院。生母大井氏久兵衛直奉女。とあり。右主馬好次、即ち實父前田修理知好主の菩提所として、太巖寺を建立せしとなり。蓋し明治廢藩置縣の後は大音氏も零落して、寺院保護の資捐なき故にや、寺地を切出し、佛閣共に賣却して、今は太巖寺も名のみとは成りたり。

○昌三派永正院廢跡

龜尾記に云ふ。太巖寺の寺地は、むかし鈴木宇右衛門といふ士ありて、常に山にて火を燒き、無念無想の法を工夫して、一派を建つ。其の派の寺ありし跡なりといへり。平次按ずるに、自他群書萬治二年の條に云ふ。鈴木昌山派の二王座禪といふ事、今年流行りて、あやしき執行なりと、曹洞宗の僧侶沮之に依つて、金澤堀川森岩寺・永正院の住職を追放し、寺破却す。昌山の七佛書など、于今有之と見ゆ、國事昌披問答に、金澤堀川に永正院といふ寺あり。萬治二年鈴木昌三派の二王座禪とて、異風なる宗門を崇め、其の派下之輩の隨一にて、爰に集り唱和す。然る處、曹洞宗より誹議するに依つて、遂に寺を破却すとあり。

○昌三派來歴

國事昌披問答に云ふ。昌三派といふ宗門の起原は、幕府の旗本士に鈴木七右衛門とて、七百石取る人あり。四十歳餘りの時駿河を逐電し、行方知られず成行きけり。やゝ年月を經、同旗本士に上田宇右衛門とて、野獵方の役を勤むる強氣なる人あり。或時高嶺に細き煙の立ちけるを見て、不審におもひ、難所をわけ登り、煙の出づる處を見届け、に、荆棘甚だ茂りて、何れそことも見定め難しといへども、岩窟に入口あり。尤いばらにて通路を止めたり。乍去透間より其内を覗き見るに、法師一人空より藤づるのふときをさげて、夫れにあぎとを懸けて、急度居長にかしこまり、眼を見開き居たり。其の側に有髮の者一人なま木を火に燃して、前後をも見ず火を吹居るなり。宇右衛門あやしく見る内に、彼法師宇右衛門の方をば一目見けり。其面さし鈴木七右衛門に似たり。故にそれなるは鈴木七右衛門にてはなきかといへば、宇右衛門か何のために來る哉といふ。先づ近付きて可話とて、互に入口の荆を取除け、岩窟に入る。さて逐電のゆゑを問へば、發心の志を語りけり。藤に

て腮をかけ置ば、眠る時は喉しまりぬる故不眠爲め也といふ。有髮の人の事を問へば、予が弟子なり。惣じて火を吹くときは、諸の念慮不生ものなり。依つて彼の者に心を凝させんために火を吹かせ置くなり。晝夜火ばかり吹きて居るといふ。此の生木の煙高嶺に立登るを宇右衛門見とがめけると也。宗門の奥義はいかゞ。昌三の執行方は如此に候。とあり。按ずるに、龜尾記に、鈴木七右衛門を宇右衛門とす。上田宇右衛門と混じたる誤りなるべし。おもふに鈴木昌三が高嶺の巖窟に籠りて、苦修練行するものは、元亨釋書釋泰澄傳に、匿身踵跡。到越知峰巖洞中。弟入内禮拜數百。高唱曰。南無十一面觀世音神變不思議者。言已出洞登峰頂。崑崙峭峙。安方不能昇。返宿洞中。遲明歸家報父。未脫履弟兒歸。後棲遲此峰。苦修練行。自薙髮爲比丘。衣藤皮食松葉。修懺積年。發得智解。自然感悟密乘。とあるにひとしといふべし。

○龍光山宗徳寺

曹洞宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開闢、永享元年開山玉窓和尚加州能美郡粟津村に建立。當寺九世翰翁和尚

者小幡宮内伯父成に付、利常卿御母公壽福院殿被爲加御意、利常卿の時小松へ引越、寺地五十間四方拜領致し造營之處、其後寺地御用に付被召上、十世快國和尚金澤へ引越、替地拜領以前遷化に付、堀川に而請地致し、小幡宮内より造立被致。當寺は遠國に末寺門葉多く有之。とあり。

○久昌寺前

元祿九年の地子町肝煎裁許附に、久昌寺前。と載せたり。久昌寺の門前地なる故也。但し明治廢藩の後、此の地邊追々家屋を毀ち、今は悉く加地等に成りたり。

○羅漢山久昌寺

曹洞宗也。寶永三年四世雪溪和尚所撰述の寺記に云ふ。本寺創基者、明巖譽和尚也。譽者素産尾州。故大相國信長公餘裔也。幼時披剃于同州小折邑久昌禪寺也。久昌者、信長公嚴夫人生駒氏、藏人家宗公女。法諱者久庵桂昌大禪定尼。薦福之道場也。譽公壯歲。偶發參訪志。腰包還到加州金府。先謁國君萱堂玉泉院公並卿族津田等。玉泉姊公者信長公女也。以有爪葛好。厥所遇甚渥。且寓止于寶圓。歷待量山・泰山二主。屢執職務。一日津田承命於玉泉公。携譽相攸於